

私と超音波

小林さゆき

獨協医科大学越谷病院循環器内科



[略歴]

昭和62年獨協医科大学第2小児科にて臨床研修医

昭和63年～現在まで獨協医科大学越谷病院循環器内科に所属

専門領域は心エコー図、心音図

超音波診断はこの半世紀において飛躍的な発展を遂げ、あらゆる臨床現場において必要不可欠な検査法となっています。

私と超音波との関わりは医師となった1年目、小児科での研修に始まります。心不全で乳児が緊急入院し、指導医が小さな探触子を乳児の心臓に当て、即座に診断、治療が開始されました。このときの手際の良さと的確な診断、そして心エコーの有用性に感心し、自分もいつか探触子1本で即座に診断できるようになりたいと思ったことが、超音波を志す最初の出発点となりました。その後循環器内科に入局し、林輝美先生のもとで心音、心エコーを御指導いただきました。「探触子をさわる前にまず沢山の症例を見ること。異常所見を見逃さないよう、目を皿のようにして観察すること。」から心エコーの修行が始まりました。当時研修医で、当直明けや深夜の緊急呼び出し翌日の超音波検査室は暗闇と静寂の空間が広がり、そこにドブラ信号の心地よい音色も加わり、先生の横で画像を凝視しているうちにいつのまにか夢の世界へということも一瞬ですが、時にありました。しかし、先生の熱意ある御指導の御陰と画像の魅力に引き込まれ、現在心エコー図検査が自分のライフワークとなっています。先生から御指導いただいたことで現在も大変役立っていることは、検査前に被検者のカルテをよく読み、得られる多くの情報を頭に入れてから、次に理学的所見をとり、超音波検査を開始するよう、徹底指導を受けたことです。このことにより、検査のポイントがしぼられ、見逃しが少なく、的確な診断につながり、現在もこの姿勢をくずさず、検査を行っています。

多くの症例を重ねながら、日々の検査の中で思うことは、どんなに技術が進み、超音波の診断精度が上がっても、基本を大切にすること、そして画像に映し出される異常所見をとらえ、最終診断するのは私たち人間であり、過信しすぎず、謙虚さを持ちながら、日々研鑽することが大切ではないかと考えるようになりました。

また、患者様とのわずかな検査時間の何気ない会話の中で心に残ることがいくつかありました。その一つですが、70歳過ぎの方であったと記憶しています。検査が終了した直後、その女性の患者様が「女性の先生に検査をしてもらえてよかった。」とふともらされたことがありました。お話をうかがうとその患者様は左乳房切除術後で、今回の心エコー検査のため、胸を開けることに大きな抵抗があり、検査を受けるか否か迷っているうちに、とうとう検査当日となりました。不安の中で検査室に入りましたが、女性に検査を担当してもらい、思わず出た言葉であったようでした。私たち検者にとっては、超音波検査は非侵襲的であり、抵抗感の少ない検査であると思いがちです。が、ひとりひとり状況は異なり、さまざまな不安を抱きながら、検査を受けておられることを再認識させられました。検査を受ける側に立ち、細やかな配慮をできるだけ心がけ、不安を与えないように検査を施行することも大切であると感じ、現在女性の患者様には年齢は関係なく、検査前に女性の検査担当者を希望される場合にはあらかじめ申し出ていただき、検査を施行しています。また、試行錯誤中ですが、乳房切除術後、若い女性の患者様には自分でデザインした手製の検査着を時々ですが、希望で着用していただいています。

日本超音波医学会は今年で83回を迎えます。超音波医学の歴史において超音波の臨床への応用はいかに患者様に苦痛を与えない検査はないものかと模索したところから始まり、多くの臨床医、研究者、技術者の方々のたゆまぬ努力と協力により大きく発展してきました。今一度、これまでの歩みを顧みて、今後の超音波診断の発展に少しでも貢献できるよう努力してまいりたいと考えております。